

宮沢賢治記念館通信

発行 〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36

宮沢賢治記念館

☎ (0198) 31-2319
FAX (0198) 31-2320

空がまるで青びかりでツルツルしてその光は
ツンツンと二人の眼にしみ込みまた太陽を見ますと
それは大きな空の宝石のやうに橙や緑やかやきの
粉をちらしまぶしさに目をつむりますと
今度はその蒼黒いくらやみの中に青あをと光って
見えるのです
(「ひかりの素足」より)



▲左奥・早池峰山

「海」が嫌いだった宮沢賢治

甲南女子大学 教授 信時哲郎



賢治は「海」が嫌いだった。そう書くと、驚かれるかもしれないが、「文語詩未定稿」に、そんな内容の詩篇がある。「[われらひとしく丘に立ち]」だ。

われらひとしく丘に立ち
青ぐろくしてぶちうてる
あやしきもののひろがりを
東はてなくのぞみけり

そは巨いなる塩の水
海とはおのもさとれども
伝へてき、しそのものと
あまりにたがふこ、ちして
たぐうつ、なるうすれ日に
そのわだつみの潮騒えの
うろこの国の波がしら
きほひ寄するをのぞみあたりき

賢治は盛岡中学校の修学旅行で、北上川を船で下って石巻で下船。小山の上にある鹿島御児神社^{かしまみこ}から海を見た時の経験を短歌に詠み、後にこの文語詩に改作した。岩手県の内陸部である花巻に生まれ育った賢治が、初めて海を見たのはこの時だとされるが、あまり感動はできなかったように読

み取れる。

山根知子は「海という概念的把握をするのではなく、名辞以前の現象をそのまま感覚的に受け取った十六歳の自分の感性を、呼び覚ましているに違いない」と書いているが（「宮沢賢治初めての海」「天気輪 3」天気輪、平成 13 年 11 月）、たしかに賢治は初めて海を見ても、「海」という名辞を使う以前の感覚に戻って「あやしきもののひろがり」や「巨いなる塩の水」などと表現しようとしているようだ。しかし、「海」という名辞を使わなかったはずの賢治なのに、詩の後半になると「わだつみ」や「うろこの国」といった海の異名をやすやすと書いてしまっている。これはいったいどういうことだろう。

つまり賢治は「地球上の陸地でない部分で、全体が一続きになって塩水をたたえている所」（『デジタル大辞泉』）である海を嫌ったわけではないのはもちろん、それを何らかの名辞で呼ぶことを嫌ったわけでもない、ということだろう。

賢治は母木光の書いた童話の批評として、次のような書簡（昭和 7 年 6 月 21 日）を送っている。「リルラといふ名前が滑らかすぎて性の悪いこどもの性格容貌が出ないと一応考へられます。どの字かをマ行、サ行、ハ行、などの一音とかへてはいかゞでせうか」。また、詩人・森荘巳池に向かって、「キャットというのは、ネコが口をあけて、ぱッとネズミにとびかかる、そんな激しい感じでしょう。……ラットというのは、背中も、しっぽも丸くして、ネズミが命からがら逃げる、そんな特徴じゃないですかね…」と語ったという。目の前を飛んでいくアシナガバチを見て「あ、すがるです。すがる……。『す』は飴いろに、あみのように、はねに翅脈が見えた感じ。『が』は、おしりの重さですかね。『る』は弧を描いて、すーっと飛び去っていった、そんな感じですね」とも語ったらしい（「花どろぼう」『宮沢賢治の肖像』津軽書房、昭和 49 年 10 月）。

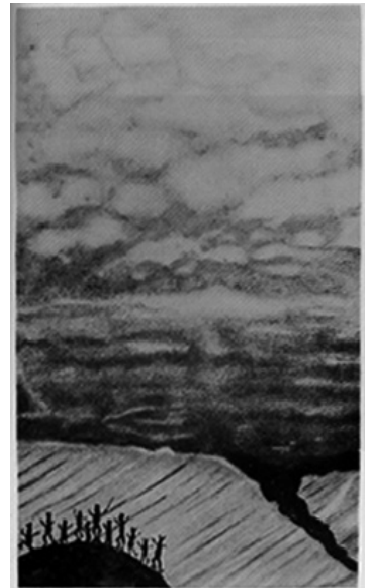
つまり、賢治にとって、「青黒くしてぶちうてる／あやしきもののひろがり」を、「わだつみ」や「うろこの国」と呼ぶのは納得できても、「うみ」と呼ぶのはためらわれた、ということだろう。青黒く、広大で、波がぶちうてる様子を示すには、おそらく「だ」のような濁音、あるいは「ろ」のような流音が必要だ、というのが賢治の感覚だったのだろう。たしかに「う」「み」という二音の

みで、あの広大なる海を表現するのは荷が重すぎるという感覚は、わからなくもない。

大沢正善は、盛岡中学校の先輩である石川啄木が、やはり修学旅行でここを訪れた時「眼下に開展した一湾の長浦、海！海！去来する太平洋の白波を指点して一同は眦をあげた」と書き、賢治の同級生だった阿部孝は「頂きの神社に疲れた足をゆるめた時、予等の眼は明るう輝いて、とゞろく胸はハッと躍つた。海が……水銀の様な広い海が……そのなつかしい輝きに沁み入る様な影をひたして静かに穏かな自由の姿を横へてをつたではないか」と感動を記していたことに比べ、賢治は逆の反応をしていることを指摘している（「『われらひとしく丘に立ち』」『宮沢賢治文語詩の森第二集』柏プラーノ、平成 13 年 9 月）。

しかし賢治は、実際に見た海の印象と「海」の音韻の違いに違和感を覚えはしたものの、実は絶叫したいほどの感動を覚えていたのではないか、という気がするのである。というのも、『新校本全集』に「〔絵画 三〕」として掲げられている絵が、石巻の鹿島御児神社から海を見た時の記憶に基づいた絵ではないかと思うからだ。この絵にタイトルは付いていないが、擬人化されたウサギが山の上で歓声をあげているもので、賢治が教え子連れて岩手山に登った際の絵ではないか、などとも言われている。なぜ、これを石巻での絵だとするかと言えば、絵の右下に黒い切れ込みがあるからだ。竜巻を描いたのだとも言われるが、農村にも甚大な被害を与える竜巻を歓喜しながら眺めている、とは考えにくい。むしろ、太平洋にそそぐ北上川を描いたと考えるべきではないだろうか？

もっとも、鹿島御児神社から海を見ると北上川は左側から海に注いでいるので、そのあたりの説明は苦しい所で、賢治の記憶違いといった事情があったとしても考えるしかない。ただ、こ



の日の石巻の天気は雲量 10 の曇天だったというので、天気については絵と一致している。

この仮説の当否はわからない。ただ確実に言えるのは、これまであまり読まれてこなかった賢治の文語詩には、賢治という人間とその作品を解くためのヒントがたくさん隠れているということだ。文語詩研究は、賢治研究の中でもマイナーな存在だが、少しでも読者が増えれば、わかってくことも増えるのではないかと思っている。

イーハトーヴを探して

花巻東高等学校 教諭 阿部 愛美



小学生の頃に家族旅行で訪れた宮沢賢治記念館と童話村で受けた衝撃は一体何だったのか追い求めているうちにここまで来た。

青森県で生まれ育った小学生の私にとって、長期休暇の家族旅行だけで訪れる岩手県の地は非常に特別な地であった。そこで得た知識や体験を書き記した旅行記のようなものは、夏休みの自由研究として学校に提出した。それは2年ほど書き続けられたもので、小学生なりの執念が先生方に伝わったのか校内の賞をいただいたと記憶している。手書きの岩手県の地図に「イーハープ」と誤字が添えられた、何とも締まりのない最終ページの自由研究であった。思えばそのころから、イーハトーヴという地の魅力に惹きつけられている。

宮沢賢治が『注文の多い料理店』の「広告ちらし」に「イーハトーヴは一つの地名」であり、「ドリームランドとしての日本岩手県」だと書いている。ただの岩手県ではなく、ドリームランドであるという。岩手県であって岩手県ではない。ドリームすなわち夢のような場所であるけれども、「イーハトーヴ」という地は実際に存在する地に紐づけられている。そのどちらとも言えない、規定できないということが、このイーハトーヴをイーハトーヴたらしめているのではないかと私は考える。そのことを強く印象付けたのは、私が大学生になって啄木賢治研究会で再読した「気のいい火山弾」による。

宮沢賢治生前未発表作品である「気のいい火山弾」は山の裾野にある「ベゴ石」に寄り添った語

りがされる童話作品である。ベゴ石は周囲の草花や石たちから^{からか}擲^はねられながら経過しているが、その「気のいい」性格のためか、反抗したり喧嘩をしたりすることなく、受け流している。いじめられているように見えるのに、歌いながら楽しそうにしている。これを読んだとき、この作品にはいじめられて辛い様子が書かれているのか、野原の自然に囲まれた楽しい様子が書かれているのか、どちらなのかわからず戸惑いを覚えた。この物語の結末は、大学の偉^{からか}そうな博士たちが突然やってきて、それまで^{からか}擲^はねられていたベゴ石のことを非常に貴重な石として評価して持ち去っていくというものだ。つまり、それまで楽しそうに歌っていたベゴ石の声が剥奪されたという見方もできる。ベゴ石が野原の生活をベゴ石なりに謳歌していたとするならば、この結末は悲劇的であるとも捉えられるだろう。

このどちらもあり得るという在り方が作品内で特に顕著なのは、同じく宮沢賢治生前未発表作品の「ポラーノの広場」であると私は考えている。物語の語り手であるレオーノキューストは、役所の部署であるという博物館に勤めており、宿直という名目で番小屋に住むことになった。この番小屋のある場所が、モリーオ市で「競馬場を植物園に拵え直す」ことが決まっている場所なのである。この番小屋は、競馬場でもあり植物園でもある、または植物園でもなく競馬場でもない場所なのである。

そもそも、この作品のタイトルともなっているポラーノの広場とはどんな場所なのであろうか。それは人々が集う場であるといえる。「ポラーノの広場」では、その広場の中心人物こそ変わるものの、いつでも人が集まっている。ただ、この広場には、特定の目的があるとは言い難い。はじめキューストたちが見つけた広場は議員の支援者の集いのように見得るが、後の語りで覆される。議員にとっては、自分が協力した会社が上手くいかないことを脅迫される会であった。キューストたちにとっては美しい自然のなかで美しい音楽が奏でられる場であり、他のある人にとってはただお酒が飲める場だった。そこに集う人によって、ポラーノの広場という場に求める目的が違う。また、議員が広場から去った後、新しいポラーノの広場の開場直前に登場人物の一人が「あのときは会社だなんてあんまりみんなですったから損に

なった」と以前の広場の失敗を振り返っている。広場から始まった組合は「はじめはなかなかうまく行かなかった」が「それでもどうにか面白く続けることができた」そうだ。目的が異なっているにも関わらず、集うことが可能なオープンスペースとしてのポラーノの広場こそ、物事を面白く続けることが可能であったのである。この言葉からは、会社では成し得ないことが広場では成し得るという可能性が示唆されている。ここに、規定されない場の可能性を感じることができると私は考えている。規定されない場としてのポラーノの広場の工場での産業は効率的に行われるとは言えないが、「みんな」で「面白く」生活の為の営みを「続ける」ことができるのだ。

現在私はご縁をいただいて花巻東高等学校の国語教員となり、高校生と共に宮沢賢治を読み味わう機会にも恵まれている。賢治祭での花巻東高等学校の生徒に朗読のご依頼をいただくおかげで、朗読の指導をしたり、授業の時間外に校内学習のメディアセンターで宮沢賢治作品を読解する会を開いたりしている。花巻東高校の学習メディアセンターでは、毎年会報を発行しており、この会報では今「イーハトーヴォ・レポート」として宮沢

賢治作品を多角的な視点から読み味わう活動を紹介している。本年度は生徒たちと宮沢賢治童話「やまなし」の英語翻訳に取り組み、宮沢賢治の作品世界と言葉の関わりに対する理解を深めた。生徒たちはひとつひとつの描写や言葉に向き合うことによって、小中学校ですでに習った「やまなし」から新しい気付きを得ることができたようである。昨年は「雨ニモマケズ」の臨書、一昨年は「雪渡り」の黍団子作り、その前は「銀河鉄道の夜」に関連する地の文学散歩と短歌づくりを行った。化学実験に挑戦した年もある。宮沢賢治作品には奥行や深さがあり、まだまだできそうなことは尽きない。



宮沢賢治の作品世界に圧倒され、わからないことが多い、規定できないと思う私の戸惑いは変わらないが、そのわからないという戸惑いに端を発した探究活動を楽しむことができるようになったと思う。生徒たちと共に作品を探求し、これからもイーハトーヴを追い求める活動を続けたい。

結 い — 賢治が繋ぐ心と心 —

「私と賢治さん」



音楽朗読ユニット
KatoShoji
(カトーショージ)

☆ 小路未央子（朗読）

私が初めて賢治さんの作品に触れたのは、7歳の時だった。今も鮮明に覚えている。杉井ギサブロー監督のアニメ版・銀河鉄道の夜だ。ますむらひろし氏の描くネコ、ジョバンニとカムパネルラの不思議な宇宙の旅だ。白鳥の停車場、奇妙な鳥を捕まえるひとがくれたお菓子、讃美歌、そして別れ。「大切な人が、いつかなくなる日が来る

のかもしれない。」その夜はなかなか眠れなかった。今思えば「死」を漠然と意識した瞬間だったのかもしれない。

大人になった私は「体感する絵本」をコンセプトに、音楽と朗読の公演活動を始めた。きっかけは、東日本大震災だった。一瞬で奪われた多くの命、計画停電によるむせるような暑い夏、終わりの見えない原発問題。収束するにはほど遠い状況に、何かを発信したいという思いに駆られたからだ。

活動を始めて二年後、CD制作の話が持ち上がった。作品を決める時、私は迷うことなく「銀河鉄道の夜」を選んだ。

改めて宮沢賢治という人について調べてみた。生まれた年に大きな震災があったということ、大切な妹を早くに亡くしたこと、化学と文学の力で全ての人々に幸いをもたらそうとしたこと…。

自分でも信じられないのだが、まるで誰かが助

けてくれるようにスムーズに収録が進んだ。収録を終えた直後、1つのニュースが飛び込んできた。「俳優の石田太郎氏ロケ中に死亡」

それは師匠の早すぎる旅立ちだった。2013年9月21日の出来事だった。そして賢治さんのちょうど80年目の命日だった。私にとってかけがえない二人が同じ日に旅立ったことは、偶然とは思えない。相方の加藤が、「二人が箒星に乗って旅ができるように」と「イーハトーブの箒星」という曲を手掛けてくれた。このアルバムはおかげさまで完売したが、毎年9月21日になると、必ず二人を思い出す。

あれから9年…。私達ユニットの旅は、まだ始まったばかりである。

ケハシキタビノ ナカニシテ
ワレラヒカリノ ミチヨフム
(花巻農学校精神歌より)

☆ 加藤 亜祐美 (ピアノ・作曲)

私にとって宮沢賢治という人は、モーツァルトのようで、ベートーヴェンのようで、弟で、兄のような人だ。しかしはじめからそうであったわけではない。小学校で初めて作品に触れた時には、何かの難解な呪文と対峙しているような気分だったことを覚えている。

そんな私自身の転機は、2011年の震災後に立ち上げたユニットのKatoShojiで初めて宮沢賢治作品に挑むことになり、題材に「銀河鉄道の夜」を選んだところにある。

作品の構成を考えるため、相方の小路の朗読する「銀河鉄道の夜」の音源を聴いていた。すると、音として流れてくる言葉たちが、まるで「音楽のように」感じられたのだ。それはとても不思議な感覚だった。

日本語なのに、外国語を翻訳したような響きの懇切丁寧な語尾。

石っ子賢さんならではの、鉱石を用いた鮮やかな色の表現。

愛らしさも毒々しさも兼ねそろえた、極彩色のオノマトペ。

それら全ては人の声を通して世界に現れる時、まさに音となって放たれ、私の心に深く沁み込み、同時に驚愕みにされた。

それから十年近く私たちは宮沢賢治作品を上演しているが、新しい作品を手がけるときはいつも、はじめに小路の朗読のみの音源をお願いしている。音源をきいていると、その言葉のリズムや響きから物語の音楽が聴こえてくる。それに合わせて私は楽曲を作り始める。

この音楽と言葉の交わる瞬間が何より私には堪らない。そして、実際に会うことは叶わずとも、作品に触れる度に少しずつ宮沢賢治という人の音を知っていくような感覚がある。

衝撃的でありながら想像を遙かに超える世界を構築し、楽観的でありながらも宿命を受け止めて真摯に生き、純粹でいたずら好きで、いざという時はそっとどこかで温かく見守っている。

だから私にとって宮沢賢治という人は、モーツァルトで、ベートーヴェンで、弟で、兄のような、心惹かれてやまない人なのである。



「賢治さんの里に育って」

郷土料理と日本酒のお店「郷酒」 料理長

鈴木 万美



久しぶりに帰った故郷は、一面の銀世界でした。どこまでも歩いていけそうな、雪の積った田んぼの上を撫ぜる、すきとほった風が都会でモ

ヤッと濁った心をさらっていきました。

私は花巻に生まれ育ち、今は東京の神田神保町で「郷酒」という和食屋を営んでいます。店名は「セロ弾きのゴーシュ」にちなんで名づけました。ゴーシュのように不器用でも一生懸命に成長していきたい、そのセロの音色のようにじんわり誰かを癒したいという思いがあります。

おかげ様で、今年で10周年。岩手食材を中心とした全国の素晴らしい食材やお酒やその生産者さん、来てくださるお客様に支えられて、どうにかここまでこられました。

宮沢賢治さんとの出会いは、物心つく前。賢治童話の朗読テープを聴き少し大きくなってからは童話集や宮沢賢治全集が家にあったので、ずいぶん夢中で読みました。何度も自由研究の題材にもしました。

賢治作品を読んでいると、風景がありありと思ひ浮かび、表現は難解でも擬音語や擬態語が興味深く、言葉にできない感覚を言い表してくれる気がしました。子ども心に驚き、大変感動したことを覚えています。日常の中の何とも言えない曖昧な感覚に、確かな輪郭や明確な音や形を持った意味を与えてくれたのです。

例えば、雪を踏めばキックキックと聴こえるし、風はどうと吹いてくるし、太陽はぎんがぎんがと眩しかった。星めぐりの歌を歌いながら夜空を眺め、サソリの火や北極星を探しました。賢治さんの世界に触れるうち、退屈な田舎がまるで物語の世界のように幻想的で彩り豊かに見えはじめました。賢治さんの言葉は、知らず知らずのうちに記憶の底に沈みこんでいて、折々に思い出されるのです。

私は普段、料理人として色んな食材を扱っています。その中で、例えば白金豚を使えば「フランドン農学校の豚」を、ジビエを使えば「なめとこ山の熊」を思い出します。賢治さんの作品を通して、生命をいただく重さ、ありがたさを改めて突きつけられている気がするのです。また、仕事が辛かった時は、「芸術をもてあの灰色の労働を燃せ」と自分を鼓舞しました。私なりの解釈ですが、芸術を愛し、自分で自分の機嫌をとり、心の中ぐらいいは豊かに楽しく暮らす、そんな生き方を教えられました。

新型コロナウイルスが流行り出した頃、私は「イーハトーボ農学校の春」の中で何度も繰り返される「コロナは…」という歌を思い出しました。それは生命の源である太陽エネルギーを喜び讃える歌です。一方、今の「コロナ」は人々の生活を変え、イキイキとした交流や豊かな時間を制限し、世界は恐怖と悲しみに包まれました。「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という言葉を痛感させられました。世の中

が混沌としている時に、自分だけ呑気にくらしませんから。

今、“本の街・神保町”にいたので、賢治さんの世界や花巻に興味を持っていただきたいという気持ちで雰囲気づくりをしています。もちろん来てくださるお客様に、賢治さんのファンの方もいらっしゃいます。

賢治さんの世界は、ぜひ、五感を全開にして感じてみることをおすすめしたいと思っています。賢治さんの果てしない空想や崇高な思想にはとうてい及ばなくても、きっと、颯爽たる未来圏から吹いてくる風を味わうことはできるでしょう。賢治さんの言葉を反芻しながら、耳を澄まし、目を見開き、足跡を辿って全身で追体験することは、とても愉快で実りある経験になると思うのです。



賢治作品の朗読は楽しい！

フリーアナウンサー 瀬川こうこ



私は花巻生まれで花巻育ち。花巻を中心にフリーアナウンサーをしています。

また、えふえむ花巻のパーソナリティもしており、担当番組の中で2015年から「このなんだりかんだり」のコーナーを作り宮沢賢治作品の朗読を始めました。これまで80作品の朗読を放送しています。

私がアナウンサーになったきっかけは演劇でした。舞台に出ているなら司会も出来るだろうと司会を頼まれるようになり、それからケーブルテレビのアナウンサーになりました。

初めは社会人になってから石鳥谷町民劇場、花巻市民劇場、劇団いっぽくなどで、役者、演出などを経験。その後、賢治作品を上演している「劇団らあす」から誘われ、賢治作品の朗読劇に出演

しました。

それまでの私は小学生の夏休みの友に載っていた「よだかの星」、国語の教科書に載っていた「やまなし」や「注文の多い料理店」など数作しか知りませんでしたが、劇団らあすでは「おきなぐさ」「鹿踊りのはじまり」「土神ときつね」「銀河鉄道の夜」などを上演し、賢治作品の幅広さ奥深さを知り魅了されました。

私は、自分自身が賢治作品をあまり読んでいない事、知らない作品が多い事に気づき、花巻市民の皆さんを始め全国の皆さんにもっと知って欲しいと思い朗読コーナーを始めました。読み始めたら次から次とその作品数の多さにも驚きでした。

賢治さんのお話は、人から動物、植物、鉱石、山、お日様、星、虹、柱やバケツまでも、地球上の全ての物に命を吹き込み、意思を持ち話し出す不思議な世界が広がっています。そこには人のあらゆる感情、やさしさ悲しさ醜さ、自然の美しさ怖さ、命とは？、明と暗までが描かれています。

朗読は一人舞台。どんな風に演じるか、伝えるか、人それぞれです。賢治作品の楽しさは会話。きつねの声を演じるのは自分でも気に入っていますが、なめくじの声？石の声？どんぐりたちの声？鳥箱の声？など「それってどんな声なの？」と想像力を最大限に発揮して読まなければなりません。それから難しいのが時折出てくる歌。適当に曲を作って歌うのですが、ラジオで放送すると思えばかなり恥ずかしく覚悟を決めてエイヤーと歌っています。(もう二度と同じ歌は歌えません)

そして、どの作品にも自然の美しい情景が描かれています。「雪渡り」や「水仙月の四日」は、東北の厳しい冬、固くキラキラした雪、はげしい風の音、冷たい空気などが感じられ、「税務署長の冒険」では、推理小説ばりの展開が面白いし、作品全般にオノマトペや方言があるのも楽しいです。方言は地元ですから得意ですよ。

好きな作品は「セロ弾きのゴーシュ」「祭の晩」「虔十公園林」など、いっぱいあります。

朗読コーナーには賢治さんファンの熱心なリスナーさんもいて次回作品を予め読んでから聴いて下さったり、毎回詳しく感想を番組に送って下さり、「こうこさんの声は七色の声」「自分が読むより場面が目に見えるようです」などのメッセージもいただき励みになっています。

賢治さんが生まれた岩手県花巻市から、こんなにも沢山の素晴らしい作品があることをもっともっと知って欲しい。聴いて欲しい。読んで欲しい。と願っています。

そして、これからも賢治作品の朗読を自分でも楽しみながら、多くの人へ発信し続けて行きたいと思います。



■《「賢治の世界」セミナー 2021》

新型コロナウイルスによる不安が依然として続くなかでしたが、今年で11年目となる「賢治の世界」セミナーを花巻市内の小中高校を会場に開催しました(市内17校18会場1,513名《昨年実績:13校15会場1,585名》)。様々な分野から、宮沢賢治と子どもたちをつなぐきっかけを作ってくださった講師の皆様、換気や消毒など会場の感染対策にご協力いただきました教職員の皆様に、深く感謝申し上げます。

今年初参加の講師、写真家・奥山淳志さんは、賢治さんが一番伝えたかった「ほんとう」という

言葉の意味について子どもたちと考えました。

驚きや尊敬、自身もやってみたいという気持ち。それはコロナ禍にあっても、感性を豊かにしていくためにとても必要なことなのだと感じています。来年度は、少しでも多くの講師の皆様に来訪していただき、花巻の子どもたちと交流ができるようになることを願っています。



《特別展》のお知らせ

◆「賢治の祈り～農民芸術～」開催中!

賢治が羅須地人協会の講義用に作図した「教材絵図」全49枚を令和3年度から公開中の企画で、この会期では41枚目から49枚目までの紹介をします。パネルでは、引き続き賢治が思い描いた農村への祈り、願いとはどういったものかを展示します。

期間

令和4年2月5日(土)～5月8日(日)

〈実物資料の公開〉

4月29日(金・祝)～5月8日(日)41-49枚目

◆童話「ツエ」ねずみ

賢治作品で主にねずみが登場するもので「ツエねずみ」、「鳥箱先生とフウねずみ」、「クンねずみ」という三作があり、どれも動物の世界をかりて人間の愚かな部分を風刺するといった共通点があります。その中でも今回の特別展では「ツエねずみ」を中心にとり上げます。大正10年頃に執筆された草稿全14枚を2期に分けて公開するほか、作品の解説をパネル展示します。

期間

令和4年5月14日(土)～7月18日(月・祝)

〈自筆草稿の公開〉

①5月14日(土)～5月22日(日)1 - 7枚目

②7月9日(土)～7月18日(月・祝)8-14枚目

◆心象スケッチ 春と修羅

宮沢賢治記念館には、これまでに寄贈、寄託された賢治の生前唯一の詩集『心象スケッチ 春と修羅』の初版本を6冊所蔵しています。今回の特別展では、これら全てを公開するほか、この本に69篇所収されている作品の中から自筆原稿を数篇公開します。令和4年度は賢治の妹のトシ没後100年ということで「永訣の朝」をはじめとするトシの死を悼む詩の公開を予定しています。



期間

令和4年7月23日(土)～9月25日(日)

〈実物資料の公開〉

①7月23日(土)～7月31日(日)

②8月6日(土)～8月14日(日)

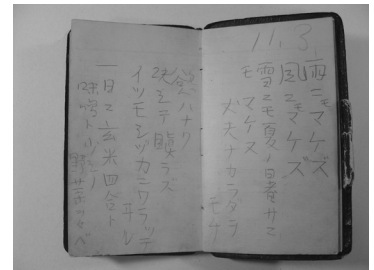
③9月16日(金)～9月25日(日)

初版本『心象スケッチ 春と修羅』

自筆草稿「春と修羅」「永訣の朝」など。

◆「雨ニモマケズ手帳」公開

賢治が死の2年前に書いた願いや希望としての「雨ニモマケズ」。東北DCの特別企画として令和3年9月に予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休館により中止となりました。令和4年度は開館40周年という記念の年でもあるので、注目度の高い「雨ニモマケズ手帳」の実物公開を再び企画します。



期間

令和4年9月16日(金)～9月25日(日)

編集後記

宮沢賢治が大好きで花巻に移住して4年目になります。今改めて移住してよかったことは、ここで暮らしていると賢治ファンと出会えるということです。以前私がいた場所では難しいことでした。今はコロナ禍で直接会うことは難しいですが、インターネットを通じて会話をしていると、岩手に、花巻に行きたい!と叫んでいる賢治ファンの多いこと。ぜひ直接会って話をしたいです。ほんの少しでもいいから、賢治さんについて語り合いたいと思っています。今回初めて宮沢賢治記念館通信の編集を任せてもらい、その想いが一層強くなりました。「賢治さんの何に惹かれているのか」は本当に十人十色ですので、色々な人から話してもらえることは、私にとってとても幸せなことです。そして私だけに留めず、花巻に暮らす方たちにも知ってほしいので、私自身がどんどんつながりを持ち、この宮沢賢治記念館通信でお伝えしていきたいと考えています。(Y・S)